# 「村から国に，そして世界へ」

## ―第34期理事長就任のご挨拶として―

理事長　木　田　秀　次*

来年は日本気象学会の創立125周年という記念の年に当ります．この節目を担当する第34期理事会にて投票により私が理事長に選任されました．私は，非力ながらも，その重責の任をお受けすることに致しました．どうぞ宜しくお願いいたします．

会員の皆様には既にご認識のように，世の中は大きな変化の途上にあって，数年先のことすら人の目にはよく見えないところです．日本気象学会もそうした渦中で舵取りが容易でないのが実状です．しかし，無理な舵を取ろうとするより，流れに棹差して前進するのが宜しいのではないかと楽観的に考えております．

これまで10数年，私は，学会の常任理事として主に学会運営の縁の下で自分に課せられた任に務めて参りました．そして，私は，これまでの強力な理事長諸先達と異なり，極く普通の通常会員の１人です．ですから，どの会員とも目線の高さは同じでお話しできると思っております．これを私のささやかな利点として生かしてゆきたいものです．

日本気象学会が抱えている問題は山積しており，１つ１つ解決してゆく必要がありますが，私が特に問題に思うところは，研究と教育の現場が極めて困難な状況に置かれている点です．これについては，日本学術会議の気象研連による対外報告書（本年の天気３月号）に問題の一端が報告されておりますので，参考にして頂きたいと思います．さらに，私の個人的関心を付け加えますと，日本でのこれまでの研究は欧米の先進的研究への傾斜が強かったけれども，これからは今以上に日本人としての独創性を発揮した研究を尊重すべきと思っております．これにより，日本での研究が真に世界に貢献できるものになるでしょう．

以上は一般論として私の思うところを述べましたが，ここで，２，３の具体的な問題に触れたいと思います．先ずは大学での教育についてですが，教員の皆さんは等しく会議や報告に多大のエネルギーを使っておられ，自分の研究はもとより学生への密度の濃い指導が難しくなっています．このような状況は，気象学・気候学の発展を鈍らせ，学会の第一義的基盤を危うくしています．これに対して，学会として真剣に取り組む必要性を強く認識しております．

次に，学会として，地球惑星科学連合には積極的に取り組み，その中で，日本気象学会が一定の主要な役割を果す必要があると考えております．一方，最近の日本気象学会は，地球惑星科学を重要な分野として含むものの，きわめて広い範囲の一大分野の学会に変貌しつつあります．この広い分野における対応中核として日本気象学会の役割と主体性は将来的にも保証してゆく事が肝要であると考えております．

さらに言及したい問題は，春秋の大会のあり方にも密接に関係しますが，研究連絡会制度です．これは10数年前に設けられたもので，その趣旨は，学会の研究活動の中でも幾つもの特化された専門分野があり，それらの専門的研究を一層強化していただけるよう，その足掛かりとして設けられた仕組みです．そして各々の会が発展すれば，米国の専門分科会のように，その特定分野だけでも研究会を独自に日本各地で開催できるほど成長することを期待しました．私は，今でも研究連絡会の各々の一層の発展を夢見ております．

何はともあれ，学会は会員の皆様によって支えられ発展するものです．また，学会は社会の動きの中で鍛えられ変化してゆくものでありましょう．こういう意味では，わが日本気象学会も，研究者の専門村から，非専門家も等しくつつむ国社会へと，そして，文化の異なる人々とも交流する世界へと変わってきたように思います．

ご挨拶の締めくくりとして，皆様にはご健勝をお祈りしますと共に，理事会へのご理解とご支援とを心よりお願い申し上げます．

* 京都大学名誉教授．

© 2006　日本気象学会